人生
山あり谷あり

第10回「きついパンツ」

名古屋大学名誉教授
愛知淑徳大学教授
井口（いぐち） 昭久（あきひさ）

私がこれから書こうとしているのはパンツのことである。ズボンのことではない。ズボンの下に履く下着である。

パンツを試着した。ズボンを脱いでステテコも脱いで下半身を裸になって。黒色のＳサイズのパンツを無理して履いて、カーテンをそっと開けて店員を呼んだ。若くて細長い顔をした眉毛のキリリとした女性の店員が、細くて柔らかな人差し指を私の臍の横の部分に強引に差し込んで言った。「お客様、これはきついですね。もう少し大きめの物をお持ちしましょうか。何色がよろしいでしょうか？」私は黒色を注文してパンツを脱いで待っていると、カーテンの上の方から細長い顔を出して、私の顔だけを見て言った。「黒のＭはありませんので、水色ではいかがでしょうか？」私は両脚をちぢめて、ＯＫと言った。店員はカーテンの隙間から右腕だけ差し出して水色のパンツを手渡した。Ｍを履いてカーテンをそっと開けて呼ぶと、人差し指を臍の所から差し込んで、ゴムを引っ張ってパチンと放して言った。「まだきついですね」。

ここまでは私が想像して書いたお話である。

先日スーパーでパンツを買った。

最近の下着類は安い。２枚組で千円以下のパンツもある。私は値段を見ないで５枚買った。１年分のパンツを買った。

若い頃から座高は高かったが腹は痩せていた。だからパンツのサイズには無頓着であった。

レジのカウンターに１万９千円と表示された。アルバイトの学生の打ち間違いであろうと思った。改めて値段を見たところ、１枚3800円であった。そのような値段の高い男物のパンツがスーパーで売っているとは知らなかった。

きりりと腹から尻を包み、ヒップが上がる新商品であった。絹でできていた。

店員は厳重に嵌めてあった枠を外してしまっていた。私は行きがかりと見栄で買うハメに陥った。

家に帰ってみれば全部Ｓサイズであった。

水泳選手が履く水着のような仕様であった。無理して履いて大学へ行った。ヒップをあげられたまま女子学生の群れの中を歩いた。

この頃、痩せているのに腹だけが出てきているので、苦痛であった。

これからどうやって５枚ものＳのパンツを履いて生きていけというのだ。

学生の頃、合わない靴に無理やり足を合わせて歩いたことを思い出した。新しい靴を買うと必ず靴ずれができたものだった。今では足に合わせるように靴を買う。文明の発達とはそういうことだ。この文明社会において私はパンツに私のお尻を合わせなければならなかった。

だからパンツの試着が必要だと思った。

試着すれば、黒眼がくっきりとして、目の動きが鋭い店員が、私の腹の周りのゴムをゆっくり引いてなぞりながら言うに違いなかった。

「お客さんに合うのは、このＬですね」